

「乞食と天使」

いつもよく働く靴屋のもとえ、あるとき、天使が現れました。乞食の姿になって…。

靴屋は乞食の姿を見ると、うんざりしたように言いました。

「お前が何をしにきたかわかるさ。しかしね、私は朝から晩まで働いてるのに、家族を養っていく金にも困っている身分だ。ワシは何も持ってないよ。

ワシの持っているものは二束三文のガラクタばかりだ」

そして、嘆くように、こうつぶやくのでした。「みんなそうだ、こんなワシに何かをくれ、くれと言う。そして、いままで、ワシに何かをくれた人など、いやしい…」

乞食は、その言葉を聞くと答えました。「じゃあ、わたしがあなたに何かをあげましょう。お金に困っているのならお金をあげましょうか。いくらほしいのですか。教えてください」

靴屋は、面白いジョークだと思い、笑って答えました。「ああ、そうだね。じゃあ、100万円くれるかい」

「そうですか、では、100万円差し上げましょう。

ただし、条件が1つあります。100万円の代わりにあなたの足をわたしにください」

「何！？冗談じゃない！この足がなければ、立つことも歩くこともできやしないんだやなこった、たった100万円で足を売れるもんか」

「わかりました。では、1000万円あげます。ただし、条件が1つあります。1000万円の代わりに、あなたの腕をわたしにください」

「1000万円…！？この右腕がなければ、仕事もできなくなるし、可愛い子どもたちの頭もなでてやれなくなる。つまらんことを言うな。1000万円で、この腕うれるか！」

「そうですか、じゃあ、1億円あげましょう。その代わりに、あなたの目をください」

「1億円…！？この目がなければ、この世界のすばらしい景色も、女房や子どもたちの顔もみることができなくなる。駄目だ、駄目だ、1億円でこの目がうれるか！」

すると、乞食は言いました。「そうですか、あなたはさっき、何も持ってないと言っていましたけれど、本当は、お金に代えられない価値あるものをいくつも持っているんですね。しかも、それらは全部もらったものでしょう…」

靴屋は何も答えることができず、しばらく目を閉じ、考えこみました。

そして、深くうなずくと、心にあたたかな風が吹いたように感じました。

乞食の姿は、どこにもありませんでした。

この文章が、あなたの前に現れた天使かも……